



聖三木図書館ロゴ

イエズス会のイルマンとして両手を掲げ、人々に教えを説くパウロ三木。とともに左耳をそがれた。他の殉教者



発行日：2012年12月3日／発行者：荒谷 幸二郎／編集者：竹内 光／デザイン：鈴木 博文／題字：山本 廣
イエズス会聖三木図書館

〒102-0083 東京都千代田区麹町6-5-1岐部ホール内 Tel. 03-3262-0364 http://www.jesuits.or.jp/~j_seimikibun/



高山右近とともに祈る

作家 加賀 乙彦

私は一九九九年に『高山右近』と云う長編小説を講談社から上梓した。ハードカバーのこの本は現在絶版になっているが、講談社文庫に入っていて入手可能である。

この小説を書くために、右近ゆかりの地を随分あちこち旅をした。

信長が畏敬した右近

まず右近の領地高槻に行ってみた。右近が領主だったころの面影は今の町に残っていないが、カトリック教会の近くに大きな右近の銅像が建っていて、ここが彼のゆかりの地であることを示していた。右近は築城術の名手で織田信長の軍勢に取り囲まれても、城壁はびくともせず、さすがの信長も攻めあぐねた。そこで城の前にこのあたりのキリシタンを逮捕して十字架につけて殺すという脅迫をしたので、右近は死を覚悟して経帷子を身にまとい、単身信長に会って人々を救い、信長の家来になることも承知した。信長は右近が利休十哲のひとつとして茶人としての名声の高いことは知っていたが、築城の名手であり、キリシタンのために命を捨てる覚悟をもっていることを知り、畏敬の念を覚えたらしい。

安土城を造るときには右近にいろいろと相談したと言う文献も残っている。その功に答えるために信長は城の真ん前に、キリシタンのセミナリオ（学校）を作ることを許して、しかも城と同じく金箔張りの瓦で飾ることをも特別に許し、セミナリオの授業を時々見学したり西洋楽器の演奏を楽しんだりした。私は安土城の廃墟を見て、セミナリオのあるところを想像してみても、信長の右近に対する信頼と家臣としての傑物として相談相手になつたことも理解できた。

本能寺の変のとき、明智光秀は右近にあてて手紙を出したが、右近は逆賊に組することはできぬと、秀吉の軍に加わり、光秀追討の先頭に立つて山崎の合戦に参加した。私は古戦場を訪れ昔をしのんだ。明智軍が総崩れになったのはよく知られた史実である。

二十五年余を金沢で過ごす

それからあと、秀吉に従い、数々の合



右近の列福を祈願巡礼

日本カトリック司教協議会（会長：池長 潤大阪大司教は、高山右近を殉教者として列福列聖する願いをローマ教皇庁に提出することを決めた。この一〇月、池長大司教を団長に大塚喜直 京都司教ら聖職者に加えて信徒有志による公式巡礼団がローマを訪れ教皇ベネディクト十六世に謁見、祝福を受けると同時に列福の早期実現を祈願した。その後一行は、ラテラーノ大聖堂などローマ市内の四大バジリカにも巡礼し、日本再宣教百五〇年の感謝と始まったばかりの『信仰年』の祈りを捧げた。写真は二〇一〇年十二月、池永大司教がローマ教皇に拝謁した時のもの。

戦で働き、遂に播磨明石の城主となった。しかし、秀吉の九州征伐に加わった時に秀吉が不意にキリシタン禁制を命令した。右近はキリシタンの信仰を棄てずに明石の領土を捨て、小豆島から肥後のキリシタン大名小西行長の所に身を隠した。その後、金沢の前田利家の計らいで金沢に身を隠した。ここに約二十六年いたあと、家康のキリシタン追放令で、一六一四年、長崎からマニラに追放された。前田家に仕えたとき、能登に所領を得たが、今はその地方から十字架やマリアの像を彫った墓石が発掘されている。その一部は金沢のカトリック教会にも展示されている。

信仰を守ってマニラへ

マニラに追放された右近を当時フィリピンを植民地にしていたスペイン人たちは歓迎した。右近が信仰を守って敢然として国外に出たいさぎよさを賛美したのであった。しかし、右近は熱病にかかり、一六一五年二月五日に帰天した。

右近の銅像がマニラの公園に作られていた。立派な像である。信仰を守って一生を送った異国人をフィリピンの人々は忘れなかつたのだと、私はその像に手を合わせた。

高山右近については、その関係する土地を私はなるべく訪れて故人を偲んだ。高槻の城跡、安土城の廃墟、山崎の合戦地、セミナリオの跡地、雪のさなかに金沢から琵琶湖畔の坂本まで歩いた跡、金沢の南蛮寺のあった石川門の前の坂道、能登のキリシタン墓地、そしてマニラ。

穏やかに権力に抗した

秀吉も徳川幕府も、キリシタン迫害に残酷な拷問と殺戮をおこなったが、その圧力のさなかに高山右近は、いつも穏やかに相対して、武力でもって敵対はしなかつた。金沢に滞在した長い年月に、教会を建て、多くの人々をキリシタンの信仰に導くことを自分の使命と考えていたし、それを実行した。その意味では、彼

は徹底して権力に反抗した信仰の人であった。

幕府の追放令に従って、金沢を去るときに、彼は自分が造営の指揮をした高岡城に二代目の殿様前田利長を訪ねたというのが、私の想像である。利長はキリシタンに寛大な人で右近の親しく仕えた人であった。金沢には多くのキリシタンがいて、右近は彼らのために、茶会を開き、ミサをあげるのを楽しみにしていた。それらの信者のなかには、前田利家の娘の豪姫もいたのである。私の書いた『高山右近』という小説は、追放される右近が、親しい二人に別れ、雪の北国街道を歩いていくという場面から始まっている。

これを書くために、フリーピンをふくめて各地の旅をして回った二十年前のことを懐かしく思い出す。

異国で帰天した信仰者

豪快な武人として人にすぐれた働きをしながら、築城の技術者であり、利休の弟子として有名な茶人であった右近のこゝとを、私は信仰の喜びを一にする昔の人として懐かしく思い出す。追放されたときに、当時としては老齢の六十歳を過ぎた体で、二月の猛吹雪のなかを歩き、さらに長崎からマニラまで荒波を航海して異国に着き、力尽きて帰天した信仰者の尊い姿を思つては、ともに祈るのが、私



【高山右近】
一五五二(天文二十)年生、一六一五(慶長二十)年没。戦国時代から江戸初期にかけての武将、有名なキリシタン大名で千利休の高弟の一人。父の影響で一五六四(永禄七)年、十二歳で受洗。洗礼名はユスト。写真は大坂教区高槻教会の前庭にある高山右近像

のひそかな楽しみなのだ。

【加賀 乙彦氏】一九二九年、東京生まれ。東大医学部卒、精神科医。フランス留学の後東京医歯大助教授、上智大教授。六七年『フランソワの冬』で芸術選奨文部大臣新人賞受賞を契機に作家の道へ。「宣告」、「湿原」、「永遠の都」など



スペインのハポンさん余話

上智大学文学部教授 橋場 義之

「スペイン サムライ末裔説明へ、ハポンさんDNA鑑定」——最近こんな見出しの記事が新聞に載つたのを目にした。ハポンとはスペイン語で日本の意味。そのハポンを姓に名乗る人々がスペインにいるのだ。

一九九六年、僕はハポンさんに会いにスペインを訪れた。当時勤務していた毎日新聞の日曜くらぶ連載企画「ハプスブルク家への旅」オーストリア千年」の取材だった。

スペイン南部のセビリアから川を溯つて約八キロ、コリア・デル・リオという小さな町に約六百人のハポンさんが暮ら

の作品で日本文学大賞ほか多くの文学賞を受ける。一九八七年に受洗。一九九九年に『高山右近』上梓。右近については、創作能や日比合作のオペラとなる。二〇一一年に文化功労者。最近、自伝的大河小説「雲の都」(新潮社・全五巻)を完結させた。この小説で本年度の毎日出版文化賞特別賞を受けた。

していた。なぜこの町にハポンさんがいるのか。

慶長使節団の末裔か

理由の一つとして、仙台藩主伊達政宗が一九一三年に派遣した「慶長遣欧使節団」一行がこの町に一時滞在した史実がある。日本にキリスト教を伝えたザビエル来日からわずか六十年後のことだ。一行はマドリッドでハプスブルク家のスペイン王フェリペ三世に謁見し、ローマも訪れて再びコリア経由で帰路に就いた。その時、一行の数人は現地に留まって結婚。その子孫が……ということから「ハポン伝説」は生まれた。

取材に応じてくれたビルヒニオ・カルバハル・ハポンさん(当時五九歳)は「自分たちは昔ここに来た日本人の末裔だと祖父から聞かされていた。その頃は出身地の名を姓にしていたからハポンという姓ができたんだろう」と語っていた。イタリヤのテノール歌手パロツティを思わせる風貌だ。彼が招かれて宮城県に行った時は「母やいとこにそっくりな人がいるんでびっくりした」という。もう一人は、たまたま九六年のミス・スペインに輝いたマリア・ホセ・スアレズ・ベニテスさん(当時二十一歳)。母方の祖父がビルヒニオさんの母親のいとこにあたるのだそうだ。大きな瞳の典型的な

アンダルシア美人で、「日本人の血が流れているのは誇りだわ」と上手な社交辞令でインタビューを締めくくった。

ゲノム解析で究明?!

新聞記事によれば、名古屋大学や国立遺伝学研究所などの共同研究チームがハポンさんたちに協力を求めて血液を採取し、ゲノム(全遺伝情報)を解析して日本人と比較するという。

約十五年前の僕の記事は、「日没せざる帝国」といわれるほど世界に版図を広げたハプスブルク帝国と「日出る国」との意外なつながりを示すエピソードとして書いたものだった。そのハポン伝説が人々のロマンから生まれたのか、それとも小さいながらも歴史の確かなひとことだったのか。今回の調査でどんな結果が出るのか、楽しみでもある一方、野暮なことを見守っている。

近頃、聖三木図書館でよく読まれている本

2012年12月

心を癒す言葉の花束 いまを生きる覚悟 老いて病み、想う 寅さんとイエス イエスの祈り	アルフォンス・デーケン 著 曾野綾子・クライン 孝子 著 川中なほ 著 米田彰男 著 教皇ベネディクト十六世 著	集英社 致知出版社 教友社 筑摩書房 カトリック中央協議会 ぶねうま舎 春秋社 知泉書館 集英社 オリエント研究所 宗教研究所 ドン・ボスコ社 新教出版社 新潮社 サンパウロ女子パウロ会
最後のイエス イエスはいかにして神となったか 在るものと本質について マザー・テレサCEO こころを病む人と生きる教会	佐藤研 著 F・ルノワール 著 トマス・アクィナス 著 ルーマ・ボース 著 英隆一朗 著	
人生を活性化する25錠 ジャン・パニエの言葉 傷つた日本人へ 愛するということ 選択 十字を切る	竹下節子 著 ジャン・パニエ 著 ダライ・ラマ14世 著 テゼ共同体 著 晴佐久昌英 著	



母性の苦難―ゆるし―再生

映画『八日目の蟬』を見て

聖三木図書館館長 宗 正孝

二人の「母」の姿

直木賞作家・角田光代の小説『八日目の蟬』が映画化され、二〇一一年度の日本アカデミー賞の最優秀賞を受賞し、同時に監督賞など十部門で一位となった。ご存知の方も多いと思うが、小説は、生後六ヶ月の女の子を誘拐し、その子を「薫」と名付けて逃亡生活を続ける野々宮希和子の四年間と、実の両親に連れ戻された女の子が実名「恵理菜」に戻った後の物語からなっている。

映画『八日目の蟬』では、大学生になつた恵理菜が主人公で、その数奇な生い立ちのために未来への希望もなく生きる姿を追っているが、映画全体の流れは、恵理菜が幼い時に「薫」として深く愛された記憶を取り戻す心の旅にもなっている。

幼児期の「母」は誘拐犯であり、逮捕と同時に幼い「薫」は、実母のもとに戻される。しかし、戻ってきたわが子を愛せない「母」とは一体何なのだろうか。血のつながりが絶対的な母性を育むものでもなく、また他人の子供を誘拐してもその子のためにだけ生きようとする母性はある。たとえ身勝手な母と思われようとも…。

「母と同じ負い目」
大学生の恵理菜は、妊娠していることに気づく。相手は家庭のある男性であり、恵理菜は、「母」と同じ負い目を負うことになるのかと思われる。実は、恵理菜の父と誘拐犯、野々宮希和子は過去に、いわゆる不倫の関係にあった。希和子は我が子を持つことができなかった事情もあって、相手の男性の妻の産んだ幼児を、衝動的に抱き上げて逃げたのが誘拐事件の真相だった。実母の悦子には、このよ

うな複雑な事情の中で、戻ってきた恵理菜を、愛情豊かな母として受けとめるのは困難なことだったのかもしれない。しかし、このように母との絆の実感も十分ではないままに育てられた恵理菜は、今度は、自分自身が本当の母になれるのだろうか。恵理菜にはその自信がない。

母も自分も赦す
恵理菜は、誘われるままに、幼い頃を一緒に過ごした千草という女性と旅に出る。幼い薫と希和子が最後に暮らした瀬戸内の小豆島の美しい自然の中で、恵理菜は母にほんとうに愛されたという記憶を呼び戻すことになる。希和子が逮捕される直前に薫と行った写真館に、母子として撮ったたった一枚の写真が残されていた。恵理菜には写真の記憶は全くなかったが、そこに写っているのは薫を包み込む優しい母の顔であった。その母は逮捕され、薫と引き裂かれる瞬間に、「この子はまだごはんを食べていません」と叫ぶのである。

「母」にほんとうに愛されていたという記憶は、自分も母になれるという希望につながる。希和子と悦子という二人の母性を受け継いで、恵理菜は、生きていくかもしれない。映画は、我が子を産み、我が子を愛情深く育てたという幸せな母を生きていることがかなわなかった二人の「母」を、恵理菜は受け入れ、ゆるしていくことを感じさせる結末になっている。妊娠しているという恵理菜に千草が、「私と一緒に育てていこうよ。二人でならお母さんになれるよ」と励ます言葉も印象深い。子供を育てることは、家族や身内の協力だけにとどまらないという優しさが心に響く。こうして恵理菜は自分を赦し、生まれ代わってくる子を愛し、皆ともに生きていけるといふ自信を固めていく

のだと思われる。題名の『八日目の蟬』は、何を表しているのか。通説ではあるが、地上の蟬は一週間の命だという。だから八日目を生き延びる蟬は、他の蟬がいなくなつた孤独な生き残りにすぎないのだろうか。ここでは、生き延びて、ほかの蟬には経験できなかった豊かないのちを生きていることになるといふ、希望と再生の象徴として受け止めることが出来るのだと私は思いたい。

聖三木図書館から

【お知らせ】

◎冬休みの長期貸出について
十二月二十三日(日)～一月五日(土)までのクリスマス休暇及び冬期休館に伴い、十二月二日(日)から長期貸出を始めます。休館中の返却はポストへ。

◎聖イグナチオ教会図書館利用について
今年八月一日より聖三木図書館友の会の利用者カードで、聖イグナチオ教会図書館でも本が借りられるようになりました。

場所||信徒会館二階
開館時間||日曜日午前十時～十二時

【友の会からのお願い】

聖三木図書館友の会の新入会および会員継続更新をお願いいたします。皆さまから愛される図書館を目指します。

- ◎年会費||一般三〇〇〇円、学生一〇〇〇円、賛助会員一〇〇〇〇円
- ◎入会手続き||氏名・年齢・住所・学生証明書などの確認書類を図書館受付にご提示ください。
- ◎更新手続き||年会費の納入をお願いいたします。
- ◎年会費は、銀行口座・ゆうちょ口座からの自動払込みをご利用いただけます。

【お詫びと記事の一部訂正】
『ゆるし』第四号二ページの『稀観本・カルメル』記事中に曖昧な記述がありました。

季刊誌『カルメル』は、跣足カルメル在会が一九五七年に創刊発行し、東京共同体のものとして保存しておられた五三号までを同共同体会長の阿部昌子氏(但し、現在会長は高橋昌子氏)からお借りしてコピーさせて頂きました。貴重な内容の『カルメル』は全号揃った。

同在会会の後を継いで、一九八二年春号から現在まで、男子跣足カルメル会本部世田谷区上野毛が発行している。その間の欠号に関して全国のカルメル会修道院から多数提供して頂いた。感謝したい。



【曝書の候】
図書館では、一年のうちの乾燥して気候のよい時期に、本の「虫干し」をする。これは「曝書」といって、エアコン付きの書庫の蔵書でも外気に本をさらして手入れする。聖三木図書館でも、職員がほこりを払ったり、汚れをふき取ったり、利用者に気持ちよく読んで頂くための作業を丁寧に進めていた。



【特別寄稿】
インクルージョン社会を目指して
〜勇気の翼をひろげて〜
細川 佳代子

「包み込む社会」の実現

「インクルージョン」という言葉をご存じですか？障がいなどの「違い」に関わらず、ありのままの素晴らしさを認め合い、誰もが生き生き輝いて暮らす社会が「インクルージョン（包み込む）社会」です。一番新しく設立した『NPO法人 勇気の翼インクルージョン2015』では、障がいのある方々と彼らを取り巻く方たちとの「交流」を通じて相互理解を深め、この「インクルージョン」社会を実現することを目指しています。

では、なぜこの活動が求められているのでしょうか。日本は年間自殺者が三万人を超え、内閣府調査では「物より心の豊かさが大事」との回答が過去最高の六四%を占めたと聞きます。頑張っても充実感がない、自分を大切に思えないといった悩みが蔓延する社会は、成果や効率を重視し、競争と排除を繰り返した結果だと皆が気づき始めました。殺伐とした現代社会を救うのは、多様な個性をお互いが尊重し、支え合う「インクルージョン理念」ではないでしょうか。

昨日の自分に勝つ

私が知的障がいのある方を支援する活動を始めたのは二十年以上前。ある牧師さんの言葉がきっかけでした。「どんなに医学が進歩しても、人口の約2%は知的障がいの子どもが生まれる。人間にとって一番大切な『優しさ』や『思いやり』を教えるため、神様が与えるプレゼントだからだ。」障がいのある人を「可哀想で不幸な人」と憐れみ、同情心で見ている私は、無意識な偏見と傲慢さに気づいたのです。彼らが幸せな人生を過ごせる

かどうかは周りのサポート次第：「良き理解者、支援者になりたい」と始めたのがスペシャルオリンピックス（以下SO）の活動でした。SOとは知的障がいの方々からスポーツトレーニングとその成果発表の場である競技会を提供する国際的なスポーツ組織。私が夢中になったのは「一人ひとりが自分の目標に勇気を持って挑戦し、ゴールまでベストを尽くし



【友の会のシンボル、ネモフィラの花】

今春もネモフィラの里、国営ひたち海浜公園（茨城県ひたちなか市）の「みはらしの丘」三、五ヘクタールに見事に咲きました。ヒヨウが降ったり突風で痛んだ花もありましたが、それでも四五〇万本の花を見ようと多くの人が訪れ、行列もできました。花言葉を『ゆるし』というネモフィラは、来春に向けて公園職員の手で播種の準備が進められています。

た人すべてが勝利者として称えられる」という独自の理念です。「ナンバーワン」より「オンリーワン」、昨日の自分に勝つことを重視する理念は、現代社会が忘れてしまった大事な精神だと思います。障がい者は暗くてマイナスのイメージではなく、サポートさえすれば個々の可能性や能力を発揮できること。助けや支えが必要な人に手を差し伸べることで、実は自分自身も限りなく幸せな気持ちになれること。誰もがかけがえのない存在で、ありのままの姿がとて尊いこと。私の人生を豊かにし、心からの「感謝」の気持ちをお伝えできたのは、知的障がいの方たちとの触れ合いであり、「共に生きる」ということでした。

上智大学の教育精神

今振り返ると、私が上智大学で過ごした時間は人生のほんの短い期間ですが、「Men and Women for Others, with Others（他者のために、他者とともに生きる）」という大学の教育精神は、本人も気づかぬ内に心の中に根づき、他人を思いやり社会に奉仕するという今の人生に、自然と私を導いてくださったようにも感じています。

社会を変えるのは私たち一人一人です！誰一人排除されることなく地域社会に受け入れられ、支え合って暮らす温かなインクルージョン社会の実現に、皆さんが勇気の翼を広げて羽ばたいてくださることを祈っております。

【細川 佳代子】一九四二年東京生まれ。

NPO法人勇気の翼インクルージョン2015理事長、公益財団法人スペシャルオリンピックス日本名誉会長、NPO法人日本フロアホッケー連盟理事長。上智大学卒業後、七一年に細川護熙氏と結婚。政治活動を支える一方、ボランティア活動に取り組み。障がいの有無に関わらず、すべての人がいきいきと暮らせる「インクルージョン（包み込む）社会」の実現を目指し活動中。

日本のカトリック教会初の原典から訳した『聖書』です。

聖書 FB-A5
定価 8,400円(税込)
・A5判上製 ・3,264頁 ・ISBN978-4-8056-4829-2

新約聖書 FB-A6N 定価 1,260円(税込)
FB-B6N 定価 1,785円(税込)
・A6判上製 ・836頁 ・ISBN978-4-8056-4013-5
・B6判上製 ・836頁 ・ISBN978-4-8056-4014-2

送料無料で 信仰年キャンペーン 【2012.10.11～2013.11.24】
※キャンペーン期間中は、上記対象書籍のご注文については送料無料でさせていただきます。他商品の同梱も可。

サンパウロ Tel. 03-3359-0451 Fax. 03-3351-9534
E-mail: suishin@sanpaolo.or.jp

聖三木図書館案内図

